

# ささやかな祈り

product1983

お姉ちゃん、ラジオがじおじおする。  
右手のせてみて。そっとね。  
あ、きれいになった！

クリアなおじさんの声が聞こえてくる。  
天気予報だ。魔女の宅急便と同じやつ。  
パリは二十度。もうオックスフォード一枚でいいんだね。  
こちらはまだマウンテンパーカーが必要です。

どうして？  
見えないのがじゃましてたから。  
電気？  
オバケかも。

そう言うと、小さな友だちは黙ってしまった。  
小さな右手でわたしの左手をきゅっと握って。  
でもわたしは深刻なムードじゃない。それはこの子もわかっている。  
ブラジルは二十七度。誰かの未来はこんなふうにして読みあげられる。

誰のオバケ？  
元カレ。事故ったんだって、リヨンで。よそ見してたバイクと。

わたしはアンドレからのメールを見せる。  
読めないだろうけど一生懸命読もうとしている。  
アンドレがドゴール空港に着いたのはまだおとといだ。

じおじおしないで。  
してないの。ありがとう。

わたしの髪がべたべたなでられる。  
けがれなき手で、むっちりしたてのひらで。

元カレ、ヤハギさん？  
そう。よくおぼえてるね。  
佐織んちにも来てたよ。背高い人でしょ。

この子の覚えているヤハギと、私の知っているヤハギは違う。  
それはきっと誰でもおんなじことなのだろうけど。

ヤハギ死んだらマリアン又泣いちゃうな。

わたしはまた携帯を見る。  
禁煙だったから、携帯をさわるしかない。  
ボタンをカチカチするとアンテナがぷらぷらする。  
五年前から機種変してない。茶色くて丸っこいやつだ。

このお料理してる人？  
そ。リヨンの教え子だって。いまもう泣いてるかもしれない。

別れたあともヤハギからのメールは友だちみたいだった。  
教えてもらったばかりの顔文字を使ったりして。

> ペンネゆでてもらった :)  
おいしそうだね

> でも一ノ蔵飲みたい :(  
知りません

おいしそう。  
うん。タコとトマト。アンドレも好きだよ。

わたしは口紅でブルーシートにタコを描いた。「チュー。」というセリフも。  
子どもはくしゃくしゃ笑って、リボンを足してくれた。  
女の子だったんだね。

お姉ちゃん。  
うん？  
食べものしりとりしよう。  
うん。

タコ。  
こんにやく。

くずきり。

リンゴ。

ごまあえ。

えだまめ。

めかじき。

切り干し。

たくさんの食べものの山から、アンドレの顔が見えてくる。  
飛ぶかどうかもわからない、ひどく混乱した空港のゲートも。  
アンドレは口元をきゅっとしぼり、まじめぶっていた。

美代子、わたしは絶対に戻りますよ。

うん。

ぐっとかたく手を握り、鼻で深いため息をつく。  
それは初めて干物を食べたときと同じ顔だった。  
そうしてアンドレ教授は亡命した。祖国の妻と娘を安心させるために。

お姉ちゃん。

え？

シだよ。イワシだから。

あ。そうだ。ごめん。シラウオ。

オ？オ、オ……。

迷子の声。ラジオからアナウンサーの落ち着いた声がする。  
わたしは安心している。無関係な誰かの安息を願っている。

オレンジ。

ジンジャーエール。

だめ。ルなんてないよ。

そっかな。

佐織の勝ち！

あ、ずるい。

二十二時のニュースが聞こえる。

ありがとうを言って、親のところに帰す時間だ。

本当に？

うん。怖い話してごめんね。

小さな手をぎゅっと握る。小さくバイバイする。

ごめんね。気づかせてしまった。

寝そべると、ひそひそ話をする家族の音が聞こえてくる。

さっきまで隣にいた子の声も、プラスチックの板ごしに。

ゆれてる。

ううん、大丈夫よ。

体育館の蛍光灯がパ、パ、パ、と消えていく。

小さなささやき声も消えてしまう。

わたしは携帯をおへそにあてて丸くなった。

あっちはいま夕暮れだな。

目をつぶると、お店の並んだ狭い小路が見えた。

プラカードや緑の旗を持った人たちでぎゅうぎゅうの広場も。

携帯は冷たかった。孵化しない卵みたいに。

でも、やがてわたしの体温を吸い、あたたかくなっていく。

ヤハギはきっと、もう生きていないだろう。

携帯の頼りないアンテナを伸ばし、つまんだ。

指にちょっとずつ力を入れ、曲げていった。

アンテナはぴんぴんに曲がり、指はふるえていた。

いまにも息があふれてしまいそうだった。

泣きそうなのか、興奮しているのか、わからなかった。

わからない。きっと違うのかもしれないけど、でも、わたしはそれを祈りだと思った